

「空飛ぶ騎手」 (アンブローズ・ビアス)

南北戦争が勃發した一八六一年の秋の日の午後、南部ヴァージニア州西部を走る急峻な山道の曲り角の茂みの中に、北軍の若い兵士が横たはつてゐた。哨兵の任務に就いてゐる裡に疲勞の餘り眠込んで了つたのだ。その山道の先にもう一つ曲り角があり、そこから平らな巨岩が突出てゐて、樹木に覆はれた直下一千フィートの溪谷を見下してゐた。

溪谷の底には北軍の五個聯隊が潜んでゐた。夜陰に乗じ山道を傳つて山の反對側に降り、敵陣地の背後を突かうとしてゐたのだ。が、萬一この奇襲の意圖が敵に察知されでもすれば、味方は恐るべき窮地に立たされる事になる。

眠つてゐた哨兵はヴァージニアの豪家の一人息子で、名をカーター・ドルーズと云つた。開戦後、北軍の接近を知つた彼が、北軍に参加したいといふ思ひを父に打明けると、父は無言の儘一瞬息子を見詰めてかう云つた、「行くがいい。ただし、何事が起らうとも、自分の義務と

信ずる事を行ふのだぞ。ヴァージニアは、叛逆者のお前からは、手を借りないで事を運ばねばならぬ」。

北軍に入つたドルーズは良心と勇氣と獻身ゆゑに認められ、最前線の危険な任務を任される迄になつてゐた。やがて彼が眠りから覺めると、かの平らな巨岩の上に「威風堂々とした馬上の人」の姿があつた。南軍の軍服を纏ひ、「ギリシヤの神」さながらの沈着ぶりを示して谷底を見下してゐたのである。

事態の急に驚いたドルーズは馬上の人に銃を向け、胸の急所に狙ひを定めた丁度その時、馬上の人はこちらの茂みに顔を向けた。ドルーズは色を失ひ、四肢は震へ、氣を失ひさうになるが、やがて冷靜を取戻して思ふ。あの敵が重大な情報を敵陣地に齎すのだけは阻止せねばならぬ以上、俺の軍人としての務めは明白だ。が、彼が何も氣附いてゐない可能性は無いのか。いや、無い。見るがいい、味方の間拔けな兵士達がどの頂から見える場所で軍馬に水を飲ませてゐるが、その光景に彼は脇目もふらず見入つてゐるではないか。

やがて南軍軍人は巨岩から降りようとした。下から見ると人馬一體となつて空中を飛翔してゐるかのやうだ。が、その刹那、銃聲がして、人馬共に絶壁の下に轉落して行つた。

再び哨兵の任務に就いてゐたドルーズの許に軍曹がやつて来て、何を撃つたのかと訊ねた。ドルーズは青ざめた顔で、絶壁にゐた馬を、父が乗つてゐました、とやうやく答へた。軍曹は歩み去りながら「なんとといふことを」と云つた。

「悪魔の辭典」で有名な米作家アンブローズ・ピアスの作品である。彼は自らも義勇兵として北軍に参加して頗る勇敢に振舞ひ、瀕死の重傷を負つてゐる。「悪魔の辭典」の「冷笑家」の項にかうある。「眼が悪くて、物事を、あるべき姿ではなく、あるがままに見てしまふ悪人。だからスキタイ人には、その視力矯正のため、冷笑家の兩眼をめぐり出す風習があつた」(筒井康隆譯)。ピアスは南北戦争の現實を「あるがままに見て」、見たが儘の眞實を語つたのだ。例へばこの作品は父を殺した息子に對する「なんとといふことを」といふ軍曹の一言で結ばれてゐるが、南北戦争は實に戦死者六十二萬人といふ、第一次大戦以前では世界戦争史上最大の戦争、しかも骨肉相食む慘憺たる内戦であつた。「空飛ぶ騎士」は内戦の悲劇を象徴する作品とも云へる。けれども、委細は次回に譲るが、ピアスは所謂反戦平和主義者では斷じてなかつた。「なんとといふことを」としか云ひ様の無い非情苛酷な現實がこの世には確實に存在する。人たるもの、まづはそれを怯む事なく直視せねばならぬ、彼はさう信じてゐた。(西川正身譯、「いのちの半ばに」、岩波文庫)